

1. さて、イエスの両親は、過越の祭りには毎年エルサレムに行った。イエスが十二歳になられたときも、両親は祭りの慣習に従って都へ上り、祭りの期間を過ごしてから、帰路についたが、少年イエスはエルサレムにとどまっておられた。両親はそれに気づかなかった。イエスが一行の中にいるものと思って、一日の道を行って行った。それから、親族や知人の中を捜し回ったが、見つからなかったので、イエスを捜しながらエルサレムまで引き返した。そしてようやく三日の後に、イエスが宮で教師たち真中にすわって、話を聞いたり質問したりしておられるのを見つけた。聞いていた人々はみな、イエスの知恵と答えに驚いていた。(2:41-47)
  - a. 今日はイエスが少年へと成長し、自分で選択をし、それについて論理的に説明できる年齢にはなっただけでも、まだご自分の使命を行なうには至らず、そしてまだ両親の監視下にあるという時期について見ていきます。
  - b. イエスの少年時代（アイデンティティに目覚め、まだご自分の使命を果たすため出て行かれていない）の一場面から、私たちも人生の中間期にどのように行動したら良いか、イエスの生き方から学びたいと思います。
  - c. ルカはイエスの誕生後、幼年期の出来事を記しています。イエスの両親は律法で定められた通り幼子を主にささげるため宮に連れて行きました。その後も少なくとも一年に3回はユダヤの祭り（過越の祭り、五旬節、仮庵の祭り）のためイエスを連れてエルサレムに上っていたようです。
  - d. この時は仮庵の祭りで、イエスの家族は帰路につきましたが、12歳のイエスはおそらく宮での時間に夢中になっていたのでしょう、家族がいなくなったことに気付かなかったのかあるいはご自分の意志であったのか、宮に残られていました。
  - e. イエスのアイデンティティと使命は（46節の「三日」という記述が暗示しているとも言われる）罪を取り除く神の子であり、数千年も続けられていた神殿礼拝にとって代わるものですが、イエスと家族は慣習に従い神殿礼拝を守っていました。
  - f. 私たちも人生の中間期にはいずれ自分を受け入れなくなる人に対しても尊敬を示すべきで、自分から拒否するべきではありません。
2. 両親は彼を見て驚き、母は言った。「まあ、あなたはなぜ私たちにこんなことをしたのです。見なさい。父上も私も心配してあなたを捜し回っていたのです。」するとイエスは両親に言われた。「どうして私をお捜しになったのですか。私が必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。」しかし両親には、イエスの話されたことばの意味がわからなかった。(2:48-50)
  - a. マリヤとヨセフの立場になって考えれば、イエスが見当たらずこの上なく驚いたことでしょう。ところがイエスは神殿という彼にとってぴったりの場所にいらしたのです。
  - b. 両親がイエスを見つけたとき、彼は話に聞き入り、情報を吸収し、質問をし、おそらくご自分の考えも話され、その賢さに周囲は驚いていました。ただ、イエスの答えは両親を混乱させるものでした。
  - c. 人生の中間期にはすべての人があなたを理解してくれるわけではありませんが、それで良いのです。認めてくれない人に対し恨んだり抵抗するべきではありません。また自分が慣れた方法、望む方法では目標地点に到達できないかもしれません。イエスご自身もナザレに戻らず神殿にとどまっていたかたかもしれません。
3. それからイエスは、いっしょに下って行かれ、ナザレに帰って、両親に仕えられた。母はこれらのことをみな、心に留めておいた。イエスはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人にと愛された。(2:51-52)
  - a. イエスはすべての点で普通の人と同じようにならなければなりません（ヘブル 2:17）。そして少年期にはますます知恵が進み、背たけも大きくなり、神と人にと愛されました。
  - b. 人生の中間期は成長する時期です。その過程を大切にし、その時期の人格にふさわしく成長していきましょう。